

『平成28年度第5回サイエンスカフェ』

主 催： 日本学術会議
日 時： 平成29年1月27日（金）19：00～20：30
場 所： 日本学術会議5階5-A(1)(2)会議室
テ ー マ： Web討論型世論調査 - ミニ・パブリックスを用いた世論形成の
可能性
講 師： 坂野 達郎さん（東京工業大学環境・社会理工学院教授、日本計画行政学会
専務理事）
ファシリテーター： 柴田 徳思さん（日本学術会議連携会員）
参加人数： 14名

国民意識を捉える代表的手法に世論調査がある。しかし、世論調査の回答者は必ずしも十分な情報を持っているわけではない。そのため、世論調査の結果を良質の民意とみなすことは難しい。一方、タウンミーティングなどの場で討議を行えば、意見の質は高まるかもしれないが、そのような場に集まる参加者の属性には偏りが生じることが多いため、意見の代表性が問題になる。この討議の質と代表性をめぐる二律背反問題を解決する方法として、無作為抽出した市民（ミニ・パブリックス）を活用した社会実験が世界各地で行われている。無作為抽出された市民が、十分な情報提供の下で討議を行えば、代表性と討議の質を高めることができるはずだという着想に基づいている。討論型世論調査（Deliberative Polling®の頭文字をとり以下DP）は、そういった手法の一つである。

現代社会においては、高度科学技術がもたらすリスクはその影響の大きさにもかかわらず、市民が日常的な経験をもとにリアリティを持って下せる判断の領域を超えている。「科学的合理性」と「市民的合理性」の対立は、現代社会固有の問題である。DPは、両者のかい離を克服し、熟慮された社会的判断を構築するための方法になりうるものと期待される。

こういった問題意識から、2015年3月、高レベル放射性廃棄物処分方法をテーマとしてWeb会議システムを用いた討論型世論調査を実施した。同調査の結果をもとに、DPの可能性と問題点について参加者の皆さんと話し合いたと思っています。

◎進め方について

本題に入る前に、ファシリテーターの柴田さんより、自由な雰囲気を進めていきたい旨が伝えられた。



(左：講師・坂野達郎さん、右：ファシリテーター・柴田徳思さん)

◎話題提供の主な事項

□ミニ・パブリックスとは

－無作為抽出された市民

□ミニ・パブリックスの有効性を支える前提

・代表性

－無作為抽出市民は、選挙によって選出される代表者グループよりも代表性が高い

・討議合理性

－無作為抽出市民による討議の場は、社会全体で討議するわけではないため、討議倫理が作用しやすい（理想的発話状況に近づきやすい）

□ 討論型世論調査 (Deliberative Polling、以下DP) とは

- 意見の代表性と討議の質の二律背反問題を克服する手法の一つとして、スタンフォード大学J. Fishkin教授が考案した手法。
- 計画細胞 (Planning Cell)、市民陪審 (Citizen Jury)、コンセンサス会議 (Consensus Conference) とともに、ミニ・パブリックス型手法を代表する手法の一つ。

□ DPにおけるプロセス上の特徴

- ・ 討議参加者の合意を求めない (あくまでも個人のより良い判断形成が目的)
- ・ 専門家の口頭による事前説明がない

□ DPの評価

- ・ 代表性関連
 - 母集団に近い属性の参加者確保ができる
- ・ 討議合理性関連
 - 討議前後で有意に知識量を増やせる
 - 知識増加と態度変容程度が正の相関を示す (知識が増加するほど態度変化が起きやすい)

□ DPの問題点

- ・ ミニ・パブリックスで形成された意見はマイクロレベルであり、社会全体のマクロレベルの意見として受容されない

□ DP普及の上での阻害要因

- 参加者の交通費や宿泊費等のコスト問題が挙げられる

□高レベル放射性廃棄物処分方法をテーマとしたWebDP

－2015年3月に、日本初のオンライン上のDPとして実施

－地層処分と学術会議提案（暫定保管と総量管理）をめぐる討議を行い、討議前後の政策態度の変容を計測

◎参加者からの質問

（以下、その時々の発言を ◆-参加者、○-講師、ファシリテーターとして一部紹介）

- ◆-私も、大学で、授業前と後での意見の変化等をみる試み（討議型のうち、討議の部分を省いた試み）をしている。討議型の場合、討議に参加する時点で相当意識が高いのではと思うが、そうであれば知識増加と態度変容程度に正の相関があるのはある意味当たり前の気がする。私の授業では、「知識が増えたから」というのと同じくらい「先生が信用できそうだから」というのが理由としてあった。つまり、そこまで自分の知識を増やして合理的に判断しようという人でない場合は、誰か信頼できる人を見つける、という判断基準を持つことがあるのではないかと思う
- 信頼については、確かに関連する。学術会議を信頼している人は地層処分に反対する、経済産業省を信頼している人は地層処分に賛成するという傾向がある。ただ、信頼のファクターがきくようになるのは、討議の後になっている。
- ◆-DPに具体的に参加された方々が自分の問題として考えていない人が多いのではと思う。高レベル放射性廃棄物処分方法の調査でも、参加者が立地地域に住んでいる人になった途端にバイアスがかかってきて状況が変わってくるだろうと思う。こうした観点をもう少し取り入れていただければ、より研究が深まるのではないかと思う。また、残余のリスク等についても俎上に上げて議論していただくとより進化するのではないかと思う。
- 短期間でやらなければならないことや長期間こういった討議に人を拘束することが現実的にどういった形でできるかという問題があり、かなり争点（論点）を捨象してしまったため、その他の論点がたくさんあるという今のご意見は非常にありがたく思っている。ご指摘いただいた点に関しては、考慮していかなければならないと考えている。

- ◆-人間の判断として、是非や善悪での判断に加え、好き嫌いで判断もあると思う。知識がいくら増えたとしても感情の部分はなかなか動かすのが難しいのではないか。知識の問題と感情の問題との連関性について何か御示唆があれば伺いたい。

- 感情については本当に仮説のレベルでしかないが、感情と合理的判断というのは対立するという考え方と対立しないという考え方があり、恐らく対立する場合もあるし、対立しない場合もあるということだと思う。しかし、感情の伴わない判断は、恐らく本当の納得にはつながっていないということなのだろう。したがって、うまく感情的なものと合理的なものが結びつくような結合のパターンを見つけ出すような仕組みを作り出せたら良いとは思っている。